

奈良市立鶴舞こども園 「最優秀園実践発表会」 開催レポート

2019年6月1日（土）、2018年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「最優秀園」を受賞した奈良市立鶴舞こども園において、「最優秀園実践発表会」を開催しました。関西地域を中心に、遠くは北海道や福岡県などの認定こども園・幼稚園・保育所・小学校・大学等の教育・保育関係者約310名の参加がありました。

以下に鶴舞こども園による開催レポートを掲載します。

発表会概要

1. 日時：2019年6月1日（土）9:00～16:30
2. 会場：奈良市立鶴舞こども園（公開保育）
奈良市立鶴舞小学校（全体会）
3. 主題：「科学する心を育てる」
「創造的なひらめきから「いい」をかたちづくる」
～「いい」こと考えたーきつと「いい」はずー「いい」とはこれだ～
4. プログラム
 - 1) 公開保育 9:00～10:50
 - 2) 開会式 11:10～11:20
 - 3) 研究発表 11:20～11:50
 - 4) 協議会・指導講評 13:00～14:40
 - 5) 記念講演 14:50～16:20
 - 6) 閉会式 16:20～16:30

公開保育

3歳児

砂場に穴を掘り、水を溜めることから遊びが始まる。A児が「こっちの温泉はあったかいよ」「こっちは冷たい」と水温の違いに気付き言葉にすると、B児もA児と同じ動きをして「こっちはお日様が当たっているからや」と話す。保育者が一緒に楽しむ中で、子どもの発見やつぶやきを言葉に出して受け止めることで、A児とB児は、更に足を泥の中に浸けると指の間から泥が出てくる感触を「くすぐったい」「気持ちいい」と喜び合っていた。

草花を使った遊びでは、ペットボトルやプラスチック容器などに花や水をいっぱい詰め、振ったり混ぜたりすることで、色水になることに興味をもって取組み「見て、黄色になった」「最初は青やったけど混ぜていたら紫色になった。不思議だね」と、保育者に伝える姿があった。また、自分で摘んだ花をナイフやフォークで切り、砂と水と共に鍋に入れ「美味しそうでしょ。チョコレートラーメンだよ」と偶然できたものを見立て言葉にする姿もあった。砂や水などの感触を思う存分味わったり、いろいろな用具を使って草花に関わったりして遊ぶ中で、子どもたちは、気づいたり感じたりした「いいこと」を言葉や表情で表出し、繰り返し試したり、周りの友達に伝わって「いいこと」が広がったりしていく姿が見られた。



4 歳児

5 歳児の転がし遊びに興味がある子どもたちは、身近に置いてあったと樋や板・波板を築山に並べ水を流して遊び始めた。水が溜まった場に目が留まったA児は、今までの経験を活かして土と水の加減を調整しながら泥にして丸め、サラ砂をかけて団子を作った。築山に置いた波板で泥団子を転がそうとするが、思うように転がらず手で押したり転がり過ぎると手で止めたりする。A児の姿を見て他の子どもたちも自分の作った泥団子で試し始めた。一方では、築山の泥をブリキの容器に集めコテやヘラ、泡だて器などの用具を使って混ぜたり、伸ばしたり、寄せたりして泥の感触を味わいながらイメージしたり見立てたりして、自分なりの「いいこと」を発見した。また、園庭の草花を集め、ビニール袋に入れて揉んだり、すりこぎで潰したりして色を出すことを楽しむ子どもたちがいた。色が出る様子を見て水の量を調節したり、ペットボトルやカップに入れてジュースに見立てたりして遊ぶ姿があった。4 歳児は、身近にある自然物や用具など「いいもの」に能動的にじっくりとかかわることで「もの」の特性が分かり遊びに活かしたり、友達の遊ぶ姿を通して「いいこと」を発見し自分の遊びにも取り入れたりしていた。



5 歳児

転がし遊びに必要な樋やホース、水槽などを自分たちで運び遊び始めた。総合遊具の上段をスタートとし、ゴールとなる水槽に向かってコースを作るイメージをもちながらも、水槽を適当に総合遊具の近くに置き、透明のホースと樋をつなげ水を流したりビー玉を転がしたりする遊びが始まった。透明なホースの中で水やビー玉が流れる様子が面白く、樋と接続しながらコースを作っていた。しかし、「透明ホースのうねりやくせをどのように扱ってゴールまで辿り着かせるか」「樋のつなぎ目からの水漏れをどう対処するか」「徐々に傾斜をつけるためにはどのようにしたらよいか」など様々な課題にぶつかる度に「いいこと考えた」と「いいこと」を実現しようと友達と試行錯誤をしながら取り組んでいた。

4 月から継続してきた転がし遊びで、子どもたちは知恵と技術を磨いてきていると感じた。微妙な高低差を調節しながら作り上げた当日のコースは、数日中で一番満足できる転がり方をし、達成感を感じることができた。

アイ・マリーゴールド・ペチュニアなどを使って色を出す。アイの葉からは色がよく出て紙や布に染まりやすいということを遊ぶ中で分かっているA児は、アイを使って濃度の濃い色水を作っていた。B児は、A児に水量や使う葉の量などを教えてもらいながら濃い色水を目指し、そこに布を浸して二人で染まった色を比べて満足そうであった。C児は、和紙や布に直接花びらを置いたり折って間に挟んだりして木槌で叩いて染める。良く色が出る草花を選び、大きさや形、色合いなどのバランスを考え、出来上がりの模様を想像しながら進める。「きっといいはず」というイメージをもち、自分で材料を選別したり方法を考えたり、友達から学んだりしながら試行錯誤を繰り返し、草花から染める技能を習得している。



研究発表

本園は、豊かな自然環境に子どもが心を動かし、環境を活かしながら遊びや生活を創造することで、豊かな感性や創造性が芽生え、自ら学ぼうとする力が育成されると考えている。では、豊かな環境さえあれば子どもは心を動かされるのか、保育者は一人一人の興味や関心をどのように探り引き出すのか、この問いを日々模索している時に「いいもの見つけた」「いいこと考えた」という子どもの表情や言葉に着目した。「いい」は心や頭にひらめいた瞬間に発せられる直観的な言葉であり、その子なりに今までにも他にない「いい」との出会いを「創造的なひらめき」と捉え、創造的なひらめきを手がかりに身近な環境にかかわりながら『いい』をかたちづくる」営みが子どもたちの主体的な遊びや活動であると考えた。

本研究では、実践事例を4つの観点で分析し考察した。

- ① ひらめき前の様子を「その前に」で表し「いい」が誘発された要因を探る。
- ② 『いい』もの見つけた』『いい』こと考えたなどの「創造的なひらめき」が表出された瞬間で、その子にとっての「いい」はどのようなものやことなのかを提示する。
- ③ 「きっといいはず」では「いい」をかたちづくる過程で信念に基づきななが経験されているのかを探り、保育者の援助や環境構成の意図も示す。
- ④ 「いいとはこれだ」では「いい」とはどういうことだと判明したのか、こどもたちは何を学んだのかを見極める。

これらのことによって、「その前に」で表した「いい」がひらめく前段には、環境、経験、偶発、課題、情動、感性などがあり、多様で年齢を追うごとに複合的である。「いいもの見つけた」「いいこと考えた」という創造的なひらめきから、行動や試行などの中で、新たな発見や気づきを得て課題が生まれ、「いい」ものや友達との関係性を深めながら、さらに「いい」をかたちづくる過程が連鎖的に続いた。試行錯誤を繰り返す中で、葛藤や他者理解、自己コントロールなどの情動体験を積み重ね、自信や意欲につながっていった。「いい」をかたちづくる過程で豊かな感性が芽生え、感性が支えとなって科学する心が育まれていくと考える。今後も子どもの「いい」をかたちづくる子ども主体の保育を目指して、研究を進めていきたい。

協議会

〈協議の視点〉

研究主題 創造的なひらめきから「いい」をかたちづくる

～「いい」こと考えたーきっといいはずー「いい」とはこれだ～

視点① その子にとっての「いい」はどのようなものやことだと思われましたか。

視点② 「いい」が誘発される要因はなんだとお考えですか。

8～10名のグループになり、上記の3つの視点に沿ってテーマに迫る話し合いを進めた。

(話し合いから抜粋)

- 3歳児の部屋の前に砂場を設けることで、子どもたちは安心・安定して自分のしたい遊びができ、その中で「いい」が誘発される。

- たくさんの草花や木々に囲まれ、子どもたちが身近に自然を感じ能動的に遊びに取り入れていた。一人一人の気付きや発見が「いい」につながる。
- 子どもの姿から昨年度の経験や知識、情報がベースとなり「いい」を発見し「きっといいはず」と試行錯誤しながら遊ぶ楽しさを味わえるのではないかな。
- 保育者は子どものつぶやきや姿を受け止め、じっくりと遊べる時間を保障することで、自分なりの「いい」が生まれ、集中して取組めることができると思った。
- 自分から存分に自然とかかわれる環境と子どもたちの「いいこと考えた」が実現できるであろう魅力的な用具などの環境を構成することで、子どもたちは主体的に「いい」に向き合って遊ぼうとする。



指導講評

本山方子氏/白梅学園大学教授

本園の研究主題や日々の実践を交え、講評をいただきました。

「創造的なひらめき」とは、機能的固着から解放されて事物の別の側面に気付くことであり、遊びや試行の出発点である。形成された遊び(方)に固着しないで更新される取り組みは、思考の深まりを促す。子ども自ら自由に環境を探索し、利用できる鶴舞こども園の環境は、遊びの展開可能性を広げる。保育者は、子どもの言動に刺激を受けたり、子どもの言葉に耳を傾け、動きに共鳴したり、子どもと共に考えたりして展開の可能性を想定することが重要である。

最後に保育は「人」であり、「環境」であると事例を挙げてお教えいただきました。

記念講演

無藤隆氏/白梅学園大学名誉教授

「子どものひらめきを活かす幼児教育ー子どもの姿ベースの保育とは」を演題に、白梅学園大学名誉教授の無藤隆氏による記念講演がありました。冒頭に、今回の教育要領・保育指針の改訂で示された、「幼児教育としての共通性」「幼児教育と小学校以上の教育を貫く柱」「幼児教育の構造や幼児教育の資質・能力」について、丁寧に解説いただきました。また、「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」から、特に科学的な思考や「科学する心」の育ちにつながる姿について、鶴舞こども園や様々な園の保育の写真を通して、掘り下げてお話いただきました。加えて、「乳児保育の充実に向けて」「記録を保護者や子どもと共有し、保育を振り返る」「子ども姿ベースの環境デザインのポイント」など、幼児教育が質の時代へ向かう今、今後の幼児教育で大切にしていけるべき点について述べられました。



次に「他園に学ぶ保育者研修」※への参加者による報告書より抜粋をご紹介します。

- 今回の発表の内容と教育要領や保育指針を絡めて、子どもの育ちがどの部分に当たることや、多数の部分に関係していることで育っている部分が意識できる。また、育ってい

※他園に学ぶ保育者研修…

「科学する心」をテーマに取り組みされている幼稚園・保育所・認定こども園に所属する保育者の方々が、他園の保育から学び、主題の理解を深め、自園の保育の質の向上に繋げていく研修の機会を支援するため、ソニー教育財団が実施している助成制度。詳しくはソニー教育財団のホームページをご覧ください。

る部分に分かることで補足する部分や足りていない部分も意識できるようになり、子どもの育ちの過程や目標などにより育ちにつなげられる PDCA ができるようになると感じた。PDCA が繰り返されることや記録をしていくことで、園全体の保育の質を高められることにつながると思った。

- 講演では幼稚園教育要領の改訂の丁寧な解説をしていただいた。「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」は説明文の語尾はすべて「～になる。」となっていること、10の姿は“その姿に育てている”のではなく、その姿に向かって育てているという意味であるということが再確認できた。また、指導計画において、子どもの活動を拾いながら広げていくことが大切であることを説明していただいた。具体的には遊びのプロセスを捉えること、ドキュメンテーション等を使った見直し実践等など大切にしたい点があげられた。
- 今回の教育要領では幼児教育と小学校教育の接続に関わる内容も大きな改訂の一つだった。その中で“10の姿”の意味を小学校と共有することやスタートカリキュラムなど、現状でどれほど小学校と接続できているか、自分自身の取り組みを振り返ることができた。講演の内容を受け、より小学校を意識した引き継ぎ、保育実践に取り組んでいきたいと感じた。
- 子どもの姿ベースから新教育要領・指針の考え方を学んだ。今回プラスされた事柄として資質・能力という点については、①体験の中で気づく・感じる・分かる力、②気づいたことから試し・工夫する・考える力、③何かに向けて取り組む・後押しする力、この3つが組み合わせられていくことで育つと解説して頂き、この資質・能力がどう育っているかが大切で、心動かされる意欲があるから工夫する・試す、この繰り返しの中で育ち、学ぶのだと繰り返された。また幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿として具体的な例をあげて話して頂いた後には、環境の多様性と遊びの持続性・継続性・発展が10の姿につながると指導計画について話されました。そこでは子どものアイデアを尊重していくこと、子どもの姿から汲み取ることなど保育の基本となる事柄の再認識ができ、日頃、当たり前すぎて無意識になりがちな点に改めて意識を向けることができた。
- 保育において大切であることを科学的な視点、捉え方で講義していただいた。自分自身が保育する上で、知識の幅を広げる必要性をより強く感じた。子どもの興味に添った活動をより多く展開できるようにしていきたいと思った。